

災害メモリアルと減災にむけた 震災資料利活用と教育普及の取組

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 村上 しほり

1. はじめに

「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」は、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の記憶と防災・減災を伝える教育施設である。資料部門においては、被災地で収集・保存してきた多様な媒体の「震災資料」約18万点の利活用を検討し、特別展示の企画や教育普及事業を実施している。

資料室の保存する震災資料は、「一次資料」（震災に直接関連する資料）と「二次資料」（図書・刊行物）に分類される。一次資料は、2002年4月の人と防災未来センター開館以前の事業で収集されてきた約16万点の資料と、開館後の調査・収集活動によって集められた資料からなる。

本稿は、震災資料の知見を活かした教育普及事業として防災ゲーム形式の参加体験型企画、出張授業等の取組、コレクション公開として企画展とスポット展示を紹介する。

2. 人と防災未来センターにおける震災資料の収集・保存

2-1 震災資料の収集・保存事業の経緯

阪神・淡路大震災の被害を伝える資料の収集は、1995年10月から、兵庫県の委託を受けた（財）21世紀ひょうご創造協会が「震災とその復興に関する資料・記録の収集・保存事業」として始めた。1998年4月以降は、（財）阪神・淡路大震災記念協会が引き継いで収集事業を続け、公開基準の検討を行った。

2000年6月からは、兵庫県の「緊急地域雇用特別交付金事業」を用いた大規模な震災資料の調査事業が2年にわたって行われた。のべ約450人の調査員が各種NPO等団体、復興公営住宅、学校などを訪ね、チラシ・ノート・写真・避難所が使用された物など、「生の」資料を集めた。（財）21世紀ひょうご創造協会や（財）阪神・淡路大震災記念協会が収集したものを含め、約16万点の資料が収集された。

2002年4月に開館した人と防災未来センター（以下「センター」と略する）では、こうして収集された資料を引き継ぎ「一次資料（原資料）」として公開し、資料室が保存・利活用にあたることとなった。

2-2 人と防災未来センター資料室の概要

当センター資料室では、阪神・淡路大震災に関連する資料を検索・閲覧できる。

2015年度は震災資料研究主幹（牧紀男・京都大学防災研究所教授）のもと、震災資料（実物資料である一次資料、図書やビデオなどの二次資料）を担当する震災資料専門員4名、資料整理推進員2名により資料室の業務運営を行っている。

資料室の主な業務は、①震災資料の調査、収集、整理、保存、②震災・防災およびその関連領域に関するレファレンス業務、③震災一次資料の閲覧申請、館外貸出についての対応、④震災学習、防災教育に関するビデオ・DVDの貸出、⑤震災、防災に関する情報発信、⑥他機関との連携、である。

一次資料約18万8千点は、適切な温湿度のもとで管理する必要があるため、収蔵庫で保存されている。来室者が閲覧を希望する場合、申請書類の提出に基づき資料専門員が出納する。二次資料である図書、雑誌、ビデオ、CD-ROM、DVDなど約3万8千点は開架式で自由に閲覧でき、資料室内のコピー機で複写も可能である。

震災資料の受け入れ、資料の貸出しに関する相談を受け付けているほか、震災や防災に関する相談に対して、参考資料の提案も行っている。

3. 教育普及事業

3-1 参加体験型企画「防災ゲーム本気あそび」の開催

当センターの2015年度夏休みイベント「防災未来学校」の開催に合わせて、資料室では参加体験型企画「防災ゲーム本気あそび」を実施した。

資料室が所蔵する18種類の防災ゲームや、防災ゲームによる学習の実践例であるNPO法人プラス・アーツ主催の「イザ！カエルキャラバン！」などを紹介する展示と、来場者が防災ゲーム「クロスロード」の設問に自らの意見を答えて、前に来場した人々の意見に学ぶ参加体験型コーナーを作成した。

2015年7月18日から8月30日までの期間を3期に分け、第1期（7月18日～8月1日）は「なまずの学校」、第2期（8月2日～16日）は「クロスロード（子ども編）」、第3期（8月18日～30日）は「シャッフル」という防災ゲームを、資料室スタッフがファシリテーターとなって実施した。



2015年度夏休み企画「防災ゲーム本気あそび」

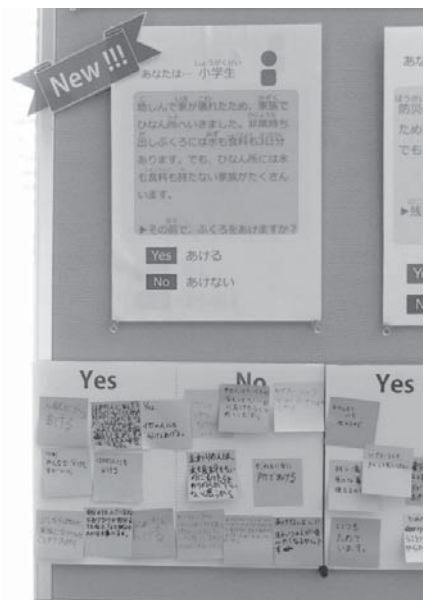


防災ゲーム「なまずの学校」で遊ぶ様子

第1期は、紙芝居ゲームの「なまずの学校」を、資料室を訪れた子どもたちと随時行った。NPO法人プラス・アーツが2010年に作成したこのゲームでは、参加者は、震災時に発生するトラブルを伝える紙芝居を見て、その状況に有効だと思ったアイテムを持ち札から1枚選び、出す。どのアイテムも重要であるが、普段から身につけておけるアイテムのほうが高いポイント（ナマーズ）をもらえる。日用品を臨機応変に用いることが防災対策には重要、というメッセージを子どもたちもよく理解し、楽しく学んだ様子が見られた。

第2期の「クロスロード」は、防災に関する困難な意思決定状況をお題として示し、参加者はYES / NOを選び、その理由について意見交換を行いながら進める、ゲーム形式の防災教育教材である。今回は、開発者の矢守克也・京都大学教授に相談して許可を得て、身近で自らの問題と捉えやすい子ども向けの8題を選び、解説を作成し、「クロスロード（子ども編）」として実施した。

また、同ゲームは、来場者に向けた参加型展示としても展開した。3題の設問を読み、フセンになぜYES / NOを選ぶのか、理由を書いて貼る形式をとったところ、小学生向けの問題では回答数が2週間で枠を超えた。そのため、定期的に新たな設問に替え、集まった意見をパネルに収めて、来室者が会期中いつでも見られるように展示に組み込んだところ好評であった。資料室には、日常的に、家族連れのみならず、学校・社会教育に関わる人々が多く訪れる。これまでの夏期イベントの実践形式のリニューアルによって、地域や学校における防災・減災の実践で利用したいとの要望を得られたことは、本取組の成果と言えよう。



参加型展示「クロスロード（子ども編）」

第3期では、第1期と同じくNPO法人プラス・アーツが開発した防災カードゲーム「シャッフル」を随時子どもたちと行った。いざという時に役に立つ防災・減災の知恵や知識を、楽しく遊びながら学ぶスタイルは「なまずの学校」と共通している。「シャッフル」の提示する防災の知恵は、「応急手当」「防災知識」「救援・救助」「サバイバル」のジャンルから12題用意されている。かわいいイラストと、何度も遊びたくなるゲーム性に、大人も子どもも区別なく盛り上がりゲームに興じた。神戸市内から訪れた来場者の中には、プラス・アーツの主催する防災イベントに参加経験のある子どもたちも多かったが、知っていることはむしろ積極性を高める作用を発揮し、自ら年齢の小さな子どもに教えようとする姿勢が見られた。一方で、中部や九州等の他地域から訪れた来場者からは新鮮に感じるとの意見が多く、書店・玩具店でも入手可能と案内したところ、家へ帰ってから遊んでいるという嬉しい後日談も届いた。

災害の体験談を聞くと深刻になりがちだが、「もしも」災害が起きたら自分はどうするかを学ぶには、楽しさを感じさせる仕掛けが有効である。その一端として、各地で作成され、

資料室が収集、所蔵してきた「防災ゲーム」の可能性を実感し得る企画となった。

3-2 夏休み企画「謎解き！ひとぼうツアー」の開催

また、8月1日には、資料室の夏休み企画として「謎解き！ひとぼうツアー」を開催した。震災資料専門員が、メモリアルセンターとして設置された人と防災未来センターにまつわるがあまり知られていない情報を伝え、震災資料を保存する2つの収蔵庫を案内するツアー。開催前には、子ども向けの理解できる内容となるか案じられるも、事前予約で満員となり、11時からと13時からの2回実施に満員以上、計53名の参加を得た。

序盤、スライドを見せてセンターのシンボルマークやモニュメントについて解説する部分では、子どもが積極的に問いかけに答え、ツアー終了後に質問をしてくださる保護者の方もいた。

近年、博物館のバックヤードを案内する企画は各所で見られる。収蔵庫の一般公開やレクチャーの何が謎なのかと思われるかもしれないが、同企画のテーマは「ふだん気がつかない・見せていないひとぼうへのご招待」であった。

防災・減災を学ぶことに意欲的すでに常設展を見学した小中学生に対して、見てきた展示の壁一面に並べられた約830点の震災資料は、収集・保存されている震災資料約18万点の0.5%に過ぎないのだ、と示すと、驚きの声が上がった。同じ建物の7階フロア全てを用いた収蔵庫が備えられていることも周知されていないため、一般の来館者は気が付かない。震災資料の家を見に行こうと、普段は関係者専用の荷物用エレベーターに乗り込むと、大人も子



「謎解き！ひとぼうツアー」の収蔵庫案内

どもも期待を高めた熱量が感じられた。2室の収蔵庫では異なるスタッフが待ち受け、何をどのように集め保存しているのか、例となる資料を準備し、寄贈者のエピソードとともにわかりやすく解説した。子どもたちの食い入るように見聞きする熱心さは、私たちの想像を上回る反応で、感想のアンケートからも手応えを感じた。

この夏休み企画では、「防災・減災」も「災害メモリアル」も楽しく学べる対象であることをアピールするにはどうすればよいかという課題に向き合うものであった。各スタッフの researched 関連情報をかみ砕き、初めて訪れた大人に、さらに子どもに伝わるわかりやすさのある構成をと何度も検討した。そして、Facebook ページを作成して更新を心がけ、イベント広報にも努めた。(ひとぼう資料室 FB ページ <http://www.facebook.com/dri.archives>)

結果的に、参加者の好評のみならず、スタッフの震災資料に関する知識の向上と情報の共有という成果が得られたことを喜ばしく思う。

3-3 出張授業「ぼうさい出前授業」の実施

毎日新聞社と当センター主催の「ぼうさい出前授業」を2013年度より実施し、資料室は、阪神・淡路大震災のさまざまな体験をもとに作られたゲーム「クロスロード」を用いた参加型授業を担当している。

2015年度は和歌山県有田川町立金屋中学校（2015年11月25日）、大阪市立天下茶屋中学校（2015年12月16日）の2校を訪問し、発災時に求められるさまざまな難しい決断への対応について状況を示して想像させ、YESかNOかを選び、意見を話す時間を設けたうえで、阪神・淡路大震災の経験を踏まえた解説を行った。このほか、各地域におけるハザードマップを調べてワークシートを作成し、地震や水害等の災害の被害想定を紹介し、自らの生活のなかでの災害対策についての想定と意見交換の大切さを伝えた。

クロスロードには正解がない。いつだって自分の立場で選ぶことやその理由を説明することは難しいが、災害時にはもっと難しくなる。だからこそ日頃から考え、学び、話しあっておくことが必要だというメッセージが届いていればよいと思う。今年は、昨年度と夏期企画の経験を踏まえて、いま伝えたいことを選んでクロスロードの問いを作り、自分たちの言葉で話すことを心がけた。



出前授業の様子（大阪市立天下茶屋中学校）

4. コレクション公開

資料室では、毎年度1回、震災資料を活用した企画展を開催している。

常設展においても、震災追体験フロア（4階）、震災の記憶フロア（3階）、防災・減災体験フロア（2階）のうち3階の震災の記憶フロアに、震災の記憶を残す「記憶の壁」として、市民の協力によって収集された震災資料を資料提供者の体験談とともに展示している。紙資料を被災環境の変化に沿って壁部分に、実物のモノ資料は壁前面に配し、ここには写真資料約500点、手記約260点、モノ資料約70点、合わせて約830点の展示資料が見られるが、これは所蔵する一次資料の総数約18万点にとって約0.5%に過ぎない。

展示というかたちで表に出ていない震災資料も、資料室に来室して閲覧申請を行えば、閲覧、撮影することもできる。しかし、防災・減災を学ぶために訪れた来館者にとって、資料を検索システムで調べ、閲覧申請を行うことは、目的に沿わないと感じられるかもしれない。

そこで、コレクション公開を企図し、毎年度1回の震災資料を活用した企画展に加え、2013年度より、常設展（3階）の一角にスポット展示「震災資料のメッセージ」を設置し、年度ごとのテーマに沿って4期の展示を行っている。

4-1 震災資料を活用した企画展

2014 年度資料室企画展「震災資料をつなぐー収集・保存の軌跡ー」

昨年、2014 年度の資料室企画展では「震災資料をつなぐー収集・保存の軌跡ー」（2014 年 11 月 7 日～2015 年 6 月 28 日）と題して、阪神・淡路大震災の震災資料の収集と保存の取組を振り返った。

阪神・淡路大震災から 20 年が経ったいま、あらためて 1995 年 1 月 17 日を振り返るためには、当時を想起させるモノや文書や映像といった「震災資料」が手掛かりになる。同展では、これら震災資料が、甚大な被害を受けた被災地において、多くの人々や団体によって試行錯誤を重ねながら集められた経緯や、センターに所蔵された震災資料が現在・未来にむけていかなる形で記憶と記録を伝えられるのか、といった点に着目した。

2015 年度資料室企画展「1.17 のしるしーイマ／ココから考える」

2015 年度の資料室企画展では「1.17 のしるしーイマ／ココから考える」（2015 年 12 月 8 日～2016 年 2 月 28 日）と題して、災害メモリアルに関する記録や表現を足元から捉えなおす展示を目指した。

今年度は震災から 21 年目。20 周年では阪神・淡路大震災そのものがあらゆる媒体でふりかえられたことを踏まえて、資料室はその「忘れない」ためにこれまでなされてきたこと、メモリアルのリアルを振り返ってみることにした。震災資料に限らない、阪神・淡路大震災から生まれたさまざまな「しるし（印、標、徴）」に着目し、震災後の 21 年間に残されてきた多様なメモリアルの表現を振り返り、2016 年を迎える「イマ」、私たちのくらす「ココ」で伝える営みを再考することが目的であった。

1995 年 1 月 17 日の出来事は、集められた震災資料や、街角に置かれたモニュメントや、震災体験の語り継ぎ、そして経験・教訓を伝える新たな動きなど多様な取組みによって、それぞれに伝え続けられてきた。それぞれのイマ／ココで繋がれたたくさんの蓄積を、自分たちの手の届く範囲で集めて整理、紹介する展示となった。

同展は、夏休み企画準備のためのリサーチで生まれた問題認識を発展させた企画展である。常設展を見る前に目に触れる 1 階ロビーを広く使用して資料室の企画展を行うことは、これまでになかった。ま



2015 年度資料室企画展「1.17 のしるし」



2015 年度資料室企画展の展示風景

た、2016年1月17日に開催される「1.17 ひょうごメモリアルウォーク」のゴール地点のHAT神戸に当センターが位置することを鑑み、兵庫県内の他地域からこの機会に訪れる人々に、このエリアと当センターについて何を伝えたいのかも検討を重ねた。

人と防災未来センターの設置段階の新聞紙上の言説や、センターの立地するHAT神戸が震災復興の都市整備によって生まれたエリアであることや周辺環境、設置されたモニュメント等、これまでの自館のあゆみや関連情報に言及し、所蔵する震災資料を読み解き、整理した点において独創的であったと考える。

4-2 スポット展示「震災資料のメッセージ」

「震災資料のメッセージ」は、人と防災未来センターに寄贈された一次資料（震災当時に使用された現物）を、年度ごとのテーマに沿って紹介する展示企画である。

本年度は「食」をテーマとし、阪神・淡路大震災が発生してから、食することにまつわる道具や必要とされたものが刻一刻と移り変わっていく様相に注目した4期の展示を行った。生命の維持のために不可欠な「水」、他所からの願いをのせた「救援物資」、ともに作り・食べることをかなえた「調理器具」を各期で取り上げ、寒い被災地の生活にあたたかさを与えた「食」を、震災資料から振り返った。

5. 課題 一震災資料の利活用促進をめざして

これからの課題は、企画展を通して震災資料の利活用促進をどのように図れるかであろう。

展示の解説員を置かない当センターは、スタッフ各人の気付きや意欲を共有、継承できるかどうか常設展への理解や、企画展それぞれの魅力や意義を左右する。センターについて、そして震災資料について、展示見学だけでは気が付かないことを伝えられるようにと改めて資料を集め、読み解き、準備に奔走した過程には、スタッフさえ知らなかった実態や経緯の新たな発見もあった。

教育普及事業としての夏休み企画への取組みは、センターの展示や施設そのものをより深く知り、ありようへの多様な見方を把握する必要性を再認識する機会となった。この経験が、2015年度冬期に開催した資料室企画展「1.17のしるしーイマ/ココから考える」における、災害メモリアルに関する記録や表現を足元から捉えなおすコンセプトに繋がり、これまでのセンターの展示と異なる、資料部門独自の切り口を生み出すことができた。

自館への理解を深めること、スタッフ間で話しあい、内外の意見を把握すること。これらは自明で論を俟たない日常的な実践ではあるが、教育普及という目的の共有によって、これまでのあゆみを顧みて新たな可能性を検討する視角を得られたと考える。これからも、先進的な他館や利用者との日々の交流と“震災資料”に学ぶ姿勢を大切に、資料の利活用への新たな視角の提案と挑戦的な表現手法の模索に取組む資料部門でありたい。

